

GA330

表象文化演習ーポップ・カルチャー／ポピュラー音楽の系譜ー

林 志津江

配当年次／単位：3～4年／4単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講 | 開講セメスター：春・秋

人数制限・選抜・抽選：選抜

他学部への公開：×

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ポピュラー音楽と、その周辺の文化現象や芸術形式（ポップ・カルチャー）について、さまざまに思考をめぐらせてみたいと思います。ロック、ジャズ、ポップミュージック、ラップ、ヒップホップ、テクノ、フォーク、パンク、J-POP、K-POP、アイドル…などと呼ばれる現象の実像、ポップ・カルチャー全般を成立させている諸要素とともに、私たちと音楽・芸術の関わりを通して見える社会のあり方にするべく迫ります。キーワードは「メディア、テクノロジー、ボディ（身体）、アイデンティティ」です。

【到達目標】

- ・芸術形式としての音楽ならびにポピュラー音楽の基本的構成要素、モダン・アートにおける形式の多様性に関する知識を身につけ、批判的な洞察を行うことができる。
- ・メディア論の主要なテーゼや「記憶」「世代」「身体性」「アイデンティティ」等の概念の意味、それらとポピュラー音楽／ポップ・カルチャー（拡大芸術）との関連を理解できる。
- ・ポピュラー音楽／ポップ・カルチャーという現象の特質、あるいは個々の作品や音楽シーンに関するテーマで、論理的に明解でまとまった自分のテーゼを提示できる。
- ・良いリスナー、良い観察者になれる。ミュージシャン／作曲家と批評家の関係、正当な音楽批評とは何か、音楽批評は印象批評を超えることができるのか、多様化する芸術形式の意義について、思考をめぐらせることができる。
- ・芸術と政治・社会との関わりとその困難に対し、誠実な想像力を持つことができ、それに関する自身の思考を言語化することができる。

【授業の進め方と方法】

- ・両学期ともに、参加者は研究発表を行います。
- ・春学期と秋学期初頭は、全授業回、ポピュラー音楽を中心とする基本的な枠組みを、時系列的に概観していきます。参加者はそのうちのいずれかについて発表を行います。
- ・秋学期は、自分自身のテーマで発表を行う方法で進めます（国際文化情報学会の参加は演習参加者のみなさん自身で決定します）。
- ・各回、発表の後は全員で議論を行います。議論に参加しない人は出席と認められません。

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	この演習について、研究発表の分担を決める、音楽について日頃感じていること、「ポピュラー音楽」と自分の関わりについて、みなでざっくばらんに話してみよう
2	「ポピュラー音楽」の基本のき	「ポピュラー音楽」って？「ポピュラー音楽」じゃない音楽って何？ポピュラー音楽とポップカルチャー、楽曲形式（1）
3	テクノロジーの夜明け	大量生産・大量消費時代の幕開け、レコード（フォノグラフ、グラモフォン）の誕生とラジオ
4	余暇の誕生	ラジオ・レコード・マイクロフォン、映画館とダンスホール、ジャズ・エイジの到来、楽曲形式（2）
5	若者・階級・音楽	余暇の誕生、中産階級の産み出した「若者」世代、ラジオと音楽、プッチュルと労働者の断絶

6	新しいメディア・新しい音楽	戦争がもたらしたものの、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国、ロックンロールの誕生
7	ラジオ、テレビの普及・映画と音楽	映画にとって好都合なヒーロー・ヒロイン像、「LPレコード」と「ドーナツ盤（45回転シングル）」
8	階級と音楽・ロックンロールからロックへ	フォークソングとビートニック、リパブルにあってロンドンになかったもの、「アーティスト」化するミュージシャン
9	カウンターカルチャーの台頭	ロックの市場価値、批評の対象となるロック、FM電波とアメリカンニューシネマ、ヴェトナム戦争と音楽フェスティバル
10	反抗の音楽／文化産業としてのロック	疎外される若者たち、「詩人的な生き方」と労働者階級の若者たち、「アートスクール」が作り出した音楽
11	人種と音楽と社会・パンク・スカ／レゲエ	階級と人種、難しくなるロックとそれについていけない若者たち、「パンクはアティテュードだ」、移民たちのスカ／レゲエ
12	階級闘争と新しいメディア・MTVの誕生	モダン・アートとミュージシャン、ディスコで過ごす夜、疲弊する工業都市とテクノ、CDと「見る音楽」の誕生
13	ロック／ポップミュージックとジェンダー	孤独とエンターテイメントの両極化、「インテリ」とロック、「女性ロックミュージシャン」という職業、女性による女性たちのための歌
14	サンプリングと冷戦の終結	DJあるいはプロデューサー、B-Boys/B-Girlsとヒップ・ホップ、ベルリンでテクノが興隆した理由
15	「日本のロック」・洋楽VS.邦楽	グループサウンズと「アメリカ」に対する憧れ、ロックかフォークか、ジャズ喫茶という文化、「はっぴいえんど」の登場

秋学期

回	テーマ	内容
16	歌謡曲ーニューミュージックかアイドルか	ロックの困難と歌謡曲の時代、アイドルという存在（1）
17	記号化するバンドとアイドル・豊かさの後の音楽	アイドルという存在（2）、インディーズと「渋谷系」、J-POPと韓流の夜明け
18	音楽のデジタルデータ化・疲弊する旧メディア	WINMXとCCCD、ナップスターとiPod/iTunes、Wi-FiとYouTube
19	研究発表（国際文化情報学会の準備）（1）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
20	研究発表（国際文化情報学会の準備）（2）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
21	研究発表（国際文化情報学会の準備）（3）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
22	研究発表（国際文化情報学会の準備）（4）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
23	研究発表（国際文化情報学会の準備）（5）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
24	研究発表（国際文化情報学会の準備）（6）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
25	研究発表（国際文化情報学会の準備）（7）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
26	研究発表（8）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
27	研究発表（9）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
28	研究発表（10）	各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う

- 29 研究発表 (11) 各自の選んだテーマに沿って研究発表を行う
- 30 まとめ 本年度のまとめ、演習内で提起されたさまざまな疑問やテーマに対するフィードバック

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・各自に必要な文献を読み、研究発表の準備を行います。

・自分にとって必要だと思う文献や、考えるヒントをつねに探し、アクセスして下さい。他の授業にも全力で取り組み、さまざまなメディアにも目配せし、情報を入手ないし取捨選択する術を磨きましょう。

・活字、特に日刊紙に日々触れて下さい。この演習での経験を、充実した日々の営みとするだけでなく、就職活動はもちろんのこと、自分の今後の人生すべての糧とするという気概を持って下さい。

・音楽を聴いたりライブへ出かけたり、さまざまな音楽に関わる活動はもちろん素晴らしいことです。それ以外にも活字に触れる、映画や展覧会、舞台芸術、スポーツ観戦、寺社巡りや街歩きなど、何でも積極的にチャレンジして、心揺さぶられる体験にたくさんめぐりあって下さい。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は用いない予定です。

【参考書】

・W.ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』『一方通行路』など（浅井健二郎ほか訳『ベンヤミン・コレクション（1）（2）』ちくま学芸文庫、1995年/1996年所収）

・Th.-W.アドルノ（三光長治・高辻知義訳）『不協和音 — 管理社会における音楽』（平凡社）1998年 / Th.-W.アドルノ（高辻知義・渡辺健訳）『音楽社会学序説』（平凡社）1999年

・M.マクルーハン（栗原裕ほか訳）『メディア論』（みすず書房）1987年

・H.ブレザンツ（片岡義男訳）『音楽の革命 — バロック・ジャズ・ビートルズ』（晶文社）1971年

・F.キットラー（石光泰夫・石光輝子訳）『グラモフォン・フィルム・タイプライター』（筑摩書房）1999年

・J.ヘーリッシュ（川島建太郎・津崎正行・林志津江訳）『メディアの歴史 — ビッグバンからインターネットまで』（法政大学出版局）2017年

・小川博司『音楽する社会』（勁草書房）1988年

・渡辺裕『聴衆の誕生 — ポスト・モダン時代の音楽文化』（中公文庫）1989年

・細川周平『レコードの美学』（勁草書房）1990年

・渡辺潤『アイデンティティの音楽 — メディア、若者、ポピュラー文化』（世界思想社）2000年

・南田勝也『ロックミュージックの社会学』（青弓社）2001年

・野田努『ブラック・マシン・ミュージック — ディスコ・ハウス・デトロイト・テクノ』（河出書房新社）（2001年）

・東谷護編著『ポピュラー音楽へのまなざし』（勁草書房）2003年

・生明俊雄『ポピュラー音楽は誰が作るのか — 音楽産業の政治学』（勁草書房）2004年

・上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか — 教育と音楽の大衆社会史』（2010年）

その他適宜、授業内で提示します。

【成績評価の方法と基準】

研究発表+授業への積極的な参加・貢献 60%、レポート課題 40%を合わせ、総合的に判断します。

【学生の意見等からの気づき】

学生からの意見ヒアリングは逐次行い、意志の疎通と内容改善につとめます。

【その他の重要事項】

・参加者の興味や意向に沿って、上記の項目や内容・順序は変更されることがあります。

・音楽が大好きという方の参加はもちろん歓迎します。バンドやオーケ、ブラスバンド部に入っている、長年何か楽器を弾いているというような演奏の楽しさ（辛さ?）を知っている人はもちろんのこと、大好きなミュージシャンやアイドルについて何か語りたい、クラシック音楽が（も）好き、とにかく自分の熱い気持ちを（本当は）誰かに伝えたいと思っている人は、いろいろな意味でこの演習が楽しめると思います。

・本演習は「音楽だけに関心があるわけではない」という人、いろんなことに興味があってひとつに決められないという方にとっても、やりがいのある内容だと思います。あなたの興味の正体は何なのか、メディアとメディアの境目には何があるのか、形式の多様性に関する問いこそが、ポピュラー音楽の本質にも関わっています。

・もちろん「音楽とか別にそんなに興味ないかも」と思っている方も大歓迎です。音楽に対する眼差しが冷静な人にこそ見える真実があるかもしれません。ポピュラー音楽とは、私たちが好むと好まざるに関わらず、現代人の日常に深く浸透している文化現象であり、演習を通じて私たちは、私たち自身の属する文明社会の一端をかいま見ることになるはずです。

・音楽学（楽典、音楽理論）やデジタル音楽技術についての知識は特に必要ありませんが、それがあればより楽しめるテーマもありえます。また平易な音楽理論は楽曲分析に必要ですが、そこは発表者の説明次第で、参加者の誰もが理解できると思います。

・音楽コンテンツを制作するという演習ではありません。

・演習は音楽サークルや音楽雑誌の愛好会とは違います。アーティストや楽曲をめぐる音楽談義を繰り返す場ではなく、むしろ音楽談義的文化の背景にあるもの、嗜好品と社会とのかかわり、アイデンティティの構成要素としての排他性について考える場所です。演習で鍛えるのは「誰もがわかる言葉で事柄を説明できる能力」の方であり、知識の量で相手を圧倒するような態度は、当然ながら評価の対象外です。

・メディア技術の発展のおかげで、今や音楽は最も安価（＝タダ同然で手に入るように思えるもの）なコンテンツのひとつになりました。演習ではもちろんそうした現象についても批判的な検討を試みますが、著作権は絶対を守って下さい。もちろん音楽以外の著作権についても同様です。